愛知・下懸（しもかけ）遺跡

1　所在地　愛知県安城市小川町下懸

2　調査期間　二〇〇〇年（平12）一二月～二〇〇一年三月

3　発掘機関　㈶愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター

4　調査担当者　川井啓介・竹内　睦・鈴木　裕・皆見秀久・池本正明

5　遺跡の種類　集落跡・自然流路

6　遺跡の年代　弥生時代～鎌倉時代

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

（岡　崎）

遺跡は、矢作川によって形成された沖積低地の微高地上に立地する。河川改修工事に伴い、三七〇〇㎡を調査した。

検出遺構は、弥生時代中期、弥生時代終末期から古墳時代前期、および奈良時代から鎌倉時代にまとまり

が確認でき、中心となるのは弥生時代終末期から古墳時代前期の遺構である。居住域と、その周辺に展開する自然流路が確認されている。自然流路からは、弥生時代終末期～古墳時代初頭の木製品も出土し、その中には未製品も多数含まれる。

奈良時代から鎌倉時代の遺構は、土坑・溝などが確認されているが、分布は希薄で性格が判明しないものがほとんどである。木簡は、自然流路の上層から一点出土した。伴出資料は乏しいが、奈良時代に帰属する可能性が高い。

8　木簡の釈文・内容

(1)　・「〈春春秋秋尚尚書書律

・「〈令令文文□□□〔是カ〕是人　(259)×24×5　039

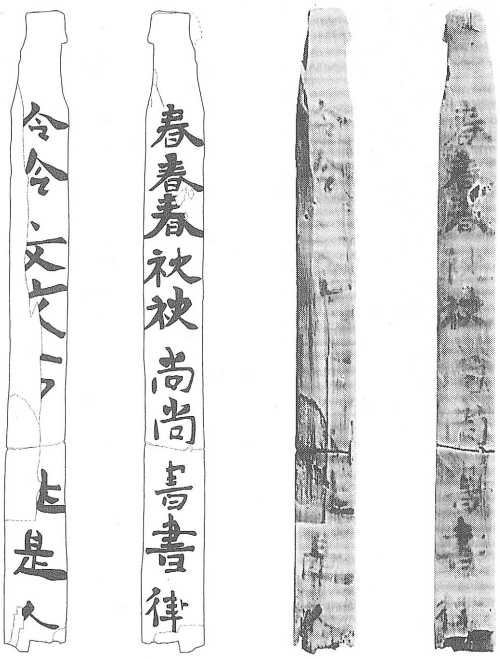
出土した木簡は、四書五経の書名などを墨書した習書木簡である。上端の一部と下端が折損している以外は、ほぼ原型を保つ。表面でいう「尚」と「書」との間で折れた状態で出土しているが、この部分の断面には刃物の痕跡が観察でき、キリオリによる切断であったと考えられる。木簡の裏面左側には文字面の剝離が観察できるが、この段階で生じたものであろうか。

なお、木簡の釈読などは奈良文化財研究所の渡辺晃宏、馬場基、市大樹、吉川聡の各氏からご教示を得た。

9　関係文献

池本正明・福岡猛志「下懸遺跡出土の木簡」（愛知県埋蔵文化財センター『研究紀要』第三号　二〇〇二年）

（池本正明）



（デジタルカメラによる赤外線撮影）